第７回　（仮称）伊賀市観光振興ビジョン策定検討委員会　議事要旨

■ **日　時**：令和４年２月２日（金）9:30～11:30
■ **場　所**：伊賀市役所　会議室 501
■ **出席者**：※敬称略、OL：オンライン対応
〔委員〕木根 英男（OL）、淺野 正嗣、長島 祥行（OL）、柳生 厚義（OL）、
三橋 源一（OL）、中川 智仁（OL）、西川 裕介（OL）、佐野 裕子（OL）、
勝原 みどり
〔事務局〕観光戦略課 川部 千佳、辻本 康文、猪口 陽平、㈱イマイシス 多久和 敦志（OL）、
㈱キカクラボ 児島 永作、㈱テイコク 原田 梨沙（OL）
■ **議　事**：
１．開会
２．(仮称)伊賀市観光振興ビジョン　中間案について
・スケジュール説明
・内容説明
・自由意見
３．(仮称)Beyond2025 プロジェクトについて
・取組概要に関する意見交換
４．その他

２．(仮称)伊賀市観光振興ビジョン　中間案について

■自由意見

淺野委員：壮大なプランというのが率直な意見である。伊賀市に住み商売をする中で、これまでも市を含めた事業者が多くの取組を行っている印象を受ける。現在コロナ禍で取組は止まっているが、コロナが明けた際、今まで行ってきた取組が今までどおり再開されると、ビジョン内で検討しているプロジェクトまで手が回らない可能性がある。既存の取組を見直し、ビジョン内で検討しているプロジェクトと結び付き、修正できるものもあると思う。コロナ禍は良い見直しの時期である。このタイミングで伊賀市が取り組んでいることを、ビジョンに向けて洗い出し、整理していく話ができたら良い。

また、他市町村で本プランと似た実例があれば、紹介していただきたい。成長していく過程で住民が感じたことや、どのように成功したのかを実例を通して知ることができれば、ビジョンが明確になると感じる。

伊賀は資源がたくさんあり計画も幅が広くなっていくため、住みやすさ、商売のしやすさ、観光資源等、埋もれている部分を見つつ、一歩ずつビジョンに向かっていけると良い。

佐野委員：策定されたビジョンは壮大で目指すところが大きいと感じている。新しい取組を実施していく中で、軸になるビジョンが作られていると認識している。この機会に、今まで行ってきた取組と新しい取組の整理が必要である。リデザインという話が出たが、これまでの活動の方向性が合わさって、複合的に今回のビジョンに向けて動ける仕組みになっていくと良いと感じた。
また、市民が主役だと強く謳う中で、市民の中の観光事業者が盛り上がっていかないと、市民は理想と現実に乖離が生まれるのではないかと感じる。
伊賀市の資源を様々な視点でＰＲするにあたり市民の巻き込みは必要であるが、新しく活動していく上でビジョンの指針だけを訴えてしまうと自分事として捉えられないので、ビジョンを伝えるために自分たちができることを考えていきたい。

柳生委員：Beyond25 プロジェクトの取組を一つ一つ行うことで、ビジョンで掲げた目標に向かって進んでいければ良いと考えている。
メナード青山リゾートは伊賀から離れているが、しっかりと情報を受け止め、来訪者に発信し、弊社の情報も伊賀市の一部として発信していただく様な形式で協力していければ良い。
アンケートにも記載があるように、市民の中には観光が潤ったところで得をするのは観光業の人だけだと捉えている方がいる。そうではなく、観光が活性化することで市民にもメリットがあることを共感してもらうことができれば、観光のやりがいを感じてもらえるのではないか。
市民が中心になるプロジェクトでもあるため、取組を市民に分かりやすく伝え、かつ、プロジェクトの進行具合の途中経過も含めて、伊賀市全体で情報共有していけば良い。

三橋委員：以前の会議でも話をしたが、熱量を求めて楽しくやっていきたい人と平穏に持続可能に過ごしていきたい人がいるため、そういった部分への踏み込みが重要だと考える。具体的に言うと、オーバーツーリズムが課題であるという記載があるが、そこで終わっている。京都市等、伊賀市に近い所ではこのような問題があるという記載や、市民の意見と擦り合わせた伊賀市の潜在的な可能性を基に熱量を上げていくといったワンクッションがないと、上滑りしていくだろう。
また、教育旅行の背景として生きる力が重要であるという部分について、リデザインという話があるように、世間がコロナや火山等の災害で、非常に先行きの見通しができない不安定な時代に、生きる力を醸成していきたい、という思いが経済界や教育界でもある。伊賀が持つ持続可能性を、市民が持つ不安感にどうアク

セスできるのかという落とし込みができれば、より深みのある旅行・観光業になると感じる。
観光業に関係はないが、柘植地域では、自分の住む地域文化を知るということで、子どもを対象に忍者道具やわら細工について説明する取組を行っている。わら細工に関して、忍者だけに焦点を当てると、忍者はわらじを履いて活動していたという話で終わる。しかし柘植地域では勧進縄祭りで、大きな縄をわらで編み、結界を張る等、村の生活にわらが必要になっている。現在、わらは機械刈りのため入手が困難で、手刈りしたものを提供している。
もち米のわらが良いため、もち米を作っているので、餅つきを皆でやろうという発想にもつながる。
観光で忍者や自然は大事だが、地域住民が求めていることを取り入れないと繋がりにくい。市が抱えている途絶えそうな良いコンテンツにアクセスして、観光として提供していく関わり方が挙げられる。個人的にも行っているが、地域住民が祭りを継続していく文化の継承にも役立つ取組を目に見える形で地域、自然と観光を繋げることが大事だと考える。

西川委員：ビジョンの内容に賛成であるが、市の立場や意見が第三者的に見える。背景として、市が観光を強化する意見であるのは分かるが、もう少し直接的に言及してもらえると市の立ち位置がはっきりして良い。
実際の稼働は行政が直接行うわけにいかないため、ＤＭＯに寄せている部分もあると思うが、行政の意見をはっきりさせることで周りの事業者も協力しやすくなる。

中川委員：南海トラフ地震が 40 年以内に 90 パーセントの確立で起こると言われており、三重県沿岸部の住民が内陸に来ると考えられる。伊賀市は盆地で山に囲まれており津波の心配がないため、災害に強いまちを打ち出すことで、これから子どもを産む世代が移住してくるのではないか。
災害に強いまちとは市民も災害についての意識が強いまちである。そのような取組を進めると地震が起きた際に災害を最低限に抑えることができ、かつ、定住人口の増加も見込めると思う。

長島委員：観光業、貸し切りバス業、福祉事業で携わっている為、情報を共有・発信して協力していきたい。
Beyond2025 の取組概要について、どのように実現していくか、どのように人を巻き込んでいくか、また、どのように良いプランを具現化していくかが重要であると思う。

これに対して、今ここに集まっている委員間の情報共有等、様々な人が前に出て取り組んでいくという気持ちを持って進めていけたら良い。

木根委員：中間案ではあるが、素晴らしいビジョンにでき上がっていると思う。
ただ、市民全員の熱量を上げていくとなると、観光振興ビジョン全体をそのまま伝えることは難しく感じる。市民への伝え方が別の検討事項として必要になってくる。

児島委員：市民に観光振興ビジョンを伝える際、市民に覚えてもらえるキーワードとして良いと感じるのが『旅住包摂』である。観光だけでなく、その先伊賀市に移住してきてもらうような観光の見据え方が感じ取れる言葉だと感じた。また、「伊賀」が入っている『みらいが、さすが。おもいが、トリガー』この２つのキーワードも非常にキャッチーである。
49 ページのキービジュアルについて、言葉ではなく、感覚的にイメージが湧くものであると思う。キーワードやキービジュアルはビジョンを伝えていく上で非常に大切なものになる。
最近、世界的にＳＤＧｓが取り上げられたり、スキャンダルに過敏になっていることについて、息が詰まる世界が待っている気がする。
その中で、伊賀という土地がＳＤＧｓの側面で自慢できるような、はみ出した点があること、逆に息の詰まる世界を緩めることができる場所になるということも伊賀の可能性である。
コロナが明けた後の機運と観光振興ビジョンが重なっていくと良い。

勝原委員：既に提示されている企画や実施されている取組の中にも非常に良いものが沢山あるが、あえてリデザインということで見直していく良い時期であると思う。また、熱量を上げていくという点でＳＤＧｓに絡めて「誰一人取り残さない」ということがキーワードだと感じる。
熱い人を作り出し熱量を伝えていくことに加え、今まで観光に興味がなかった市民にも伝えていくような工夫が必要になっている。現在、取り組んでいることや市が観光に対して行っていること、自分たちが行うことが伝わるようなプロモーションに力を入れていくべきである。

３．(仮称)Beyond2025 プロジェクトについて

事務局：プロジェクトの実施にあたっての具体的な方策について議論したい。
それにあたり、ＤＭＯと行政の役割について改めて整理する。行政は行政しかできないトイレなどの収益性のない公共施設の整備や観光案内看板など領域について

しっかりやっていき、それ以外のことはＤＭＯがなっていく。
ただし、観光戦略課だけで対応できない業務も多いため、市の業務体制のリデザインが前提にあり、こちらも並行してやっていく。
行政サイドの機構に対する意見も含め、ご意見をいただきたい。

■取組概要に関する意見交換

淺野委員：稼げる部分と稼げない部分、行政内での役割のリデザインは事業者では対応できないので、検討をお願いしたい。
事業者として今後どのようにお金を稼いでいくかが大きな問題となるため、今後どのように動いていくか考えると、ワークショップや何か新しいアイデアが出せる場所が多ければ多いほうが良い。マッチングなど事業者同士が話す機会があると面白いと思う。
本委員会の良い点は、ざっくばらんに様々な意見や本音が聞けるところである。このような会をカジュアルにしたり、設備が整った場所を整備しても良い。
プロモーションについて、49 ページのキービジュアルで見せていくというのも面白かった。
事業者と事業者が一緒になれば、もっと新しい企画は出てくるのではないか。事業者は、伊賀に住み事業を行っているため、市民でありながら事業者である。そのような形でどんどん新しく面白い企画が出てきたら良い。アイデアを実行していくために、様々なアイデア出し、多くの人を巻き込んでいけば面白いと感じる。伊賀市を飛び出ても面白い。

柳生委員：事業者が情報交換をしたり、顔を広げていく共有の場所があれば、企画等で盛り上がると思うが、全ての事業者となると数が多い上、毎回情報のフィードバックをするのも大変である。そういう意味では熱量のある事業者しか集まらない懸念はある。
プロモーション関係についても、事業者によっては「難しそう」「関連してない」等の意見も見受けられる。研究会で情報を聞くだけでも価値があるような、参加しやすい研修会を開くことで事業者の熱量も高まっていくのではないか。
本委員会は、非常に意見が言いやすく、思ったことを話せる良い場所であるが、人数的な課題がある。多過ぎてもまとまらない上、小数だと一部で盛り上がりを見せる。間を取ったバランスの取れたプロジェクトになれば良い。

三橋委員：自分としては、地域と観光のつながりづくりを始めている。
わらを通じて有機農業等、地域の休耕田での農業振興と文化継承し、その中で忍術と関連させる。加えて、山の管理、山城をいろいろ回ることで忍びの術を磨く。

村の石川五右衛門史跡と地域資源、忍者と石川五右衛門の関係を繋ぐイメージである。
また、防災コンサルもやっており、ＳＤＧｓと防災を関連させていく。伊賀の自治協議会での防災講演を３年程続けており、形になりつつある。
上記の取組に共通しているのは、稼ぐ、稼げないという話ではなく、持続可能な社会にするために必要な仕事があり、事業者でも市職員でも休み時間に取組に参加したり、週末に山の手入れを行う取組等から熱量を上げていき、加えてその場で市民の声を聞くことができると、より良い。
壮大な目的であり、高い目標ではあるが、まず地域住民と触れ合うような機会をつくると、実のある会議になるのではないか。

西川委員：民間法人であるＤＭＯは基本的に観光を通じて稼ぐことを国や地域から期待されている組織である。観光振興ビジョン上、ＤＭＯが行うことが多くある一方、公共的な部分を担い、地域の事業者を繋ぐ部分をボランティアベースで行うのは永続的な動きになりづらいのではないか。あくまで民間法人であり、自分たちで自走する前提があると、事業内容をこちらで規定するのも難しく思う。
ＤＭＯも全ての事業者を平等に取り上げて、すべてに対し送客することには限界がある。そのため、市やＤＭＯが盛り上がりを見せる事業者を取り上げて広報し、つないでいく機会をつくるよう取り組んでいければ良い。
継続的に様々な組織体を立ち上げるような記載があるが、多くの取組を行うと全て中途半端になり継続しにくいと感じる。一つに特化して、2025 年までに「全国１番のＤＭＯの取組」といった、とがったものをつくれると良い。

中川委員：プロモーションに関して、スポーツイベントで伊賀の認知度を高めるといった点で『伊賀越えマラソン』を企画していただきたい。
参加者が徳川役で逃げ、主催者は明智役でタイムキーパーを行い、追いかけるイベントとして成立させる。また、参加者が徳川軍と明智軍に分かれて、総合計タイムで競い合うという企画。加えて、忍者が助けたことに関連して、忍者の格好をした人が給水所でマラソンランナーに水を配る等を行うと、歴史と自然に同時に触れることができるのではないか。タイムも制限を緩め、マラソンランナーの登竜門になれば良い。

長島委員：進むべき方向性は決まっているため、どのような人が関わっていくのかが最も重要である。商工会や広報を通じて事業者や個人を募り、熱量を求めるという部分では、熱量の高い人を集めることが必要であると感じる。
情報共有の場であるワークショップを基に、熱量の高い人を厳選していければ

良い。熱量がある人を発掘することで、様々な地域から伊賀市を盛り上げていくという方向に持っていけるのではないか。

木根委員：Beyond2025 プロジェクトの取組概要を 2025 年までに行おうと思うと、あまり時間がなく、現在挙がっている項目だけでも多い。ＤＭＯを中心に検討し、最初の段階では取組に差が出ても良いと考えている。
その上で行政にしかできないことを検討したり、子どもたちに文化・伝統を継承していく切り口で教育に繋げる等、観光と直接関連していない部分でも行うことがあると感じる。
観光振興ビジョン 26 ページでは、観光振興に否定的であったり、脱忍者・非忍者等、様々な市民の意見があるが、ポジティブにもネガティブにも伊賀市の人は『忍者』を気にしているため、『忍者』は外せない。だからこそ、忍者に固執する割に中途半端ではないかという意見が出る。
文化伝統を継承するために『忍者』は必要であり、その上で『忍者』は当たり前であるといった取組を行政主導でできないか。例えば忍者衣装について、観光客は着ているが伊賀市民は着ない。しかし、子どもが通学に忍者衣装を着ているとなると「常に忍者がいる」まちになる。
子ども用の忍者衣装は市が提供し、着用すると教育にプラスになるクーポンを発行する等のインセンティブ付けても良い。観光目的ではなく、違うところに力点を置きながら、忍者をまちの中や未来に浸透させていきたい。

児島委員：リノベーションスクールという取組が全国各地で行われている。2、3 日の突貫で、空き家物件を提供する人と、そこで何かを行いたい若者が、建物の歴史や持ち主の人のインタビュー等を行った上で、この場所で行いたい内容を発表する取組である。
伊賀流のリノベーションスクールを行っていきたいと考えている。伊賀市には空き家物件が多くあるため、そこで何かを行いたい人を集めリノベーションスクールを行い、資金的な援助が付く等があると面白いと感じる。
2 年前に沼津市でリノベーションスクールに講師で参加した。そこでは空き家物件利用だけでなく、事業のリノベーションやまちづくりに関わるアクションを行い、老舗の乾物屋の事業リノベーションを行うチーム、【枚方つーしん（ひらつー）】を立ち上げた原田氏とローカルメディアを立ち上げるチーム、伊賀市で新天地商店街を手掛けた加藤氏とマルシェを立ち上げる３チームに分かれて取り組んだ。
原田氏が手掛けたチームは【ぬまつー】というローカルメディアを立ち上げた。ぬまつーの夢は、沼津市の人口程度にページビューを伸ばすというものであっ

たが、去年、参加者であった渡会信介氏がぬまつーを会社化し、昨日ページビューが沼津市の人口 19.5 万人を超えた。
２年の期間が空いても熱量を持ち、その際一緒のチームであった人がぬまつーのメンバーになり、ページビューを伸ばし、沼津市のメディアの１つになった事例がある。２番のプロジェクトコンペについても、やり方次第では、空き家を再利用した新事業が若者によって実現されていく等が起こり得る。
行政として、このような取組に出せるお金を用意できるのかどうか、民間が出資しプランを応援する、または事業者が次の一手のプランニングをこのようなイベントで募集してみる等の取組があると面白いと感じる。

勝原委員：取組概要が①から④まであり、期間が限られている中、全てを行うのは難しく感じるが、少しずつ全てを進める、又、同時に進めていくことも重要であると感じる。
③DMO を中心とした情報の一元化については多くの意見が出ていたこの時期に精査し、集約・データベースを構築するなかで現状分析を行うことも重要である。

以上